

神奈川支部情報

第16号 発行日 2010年5月6日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

3月13日に引き続いて14日は絵鳩さんに証言をしていただきました。その2日後には97才を迎えられました。この日も会場は満席で、用意した資料が足りなくなって主催者を困らせるほどに多くの方々が参加して下さいました。

絵鳩さんには、当日発刊にこぎつけた小冊子<「撫順戦犯管理所の6年」監獄が自己改造の学校であった>と同じ表題で証言をお願いしました。絵鳩さんにはこれまであらゆる角度から何回も何回も証言してくださっていますが、撫順戦犯管理所での体験に絞ってじっくりと証言をしていただいたのは初めてです。

今日の絵鳩さんの話を聞いて、さらに発刊したばかりの小冊子を読んでいただければ「鬼から人間に」立ち戻る過程での管理所職員たちがどんな思いで導いてくれたのか、またその応えた絵鳩さんと戦犯たちの生まれ変わるときの苦しみ、そして生まれ変わったときの喜びが、読めば読むほどに伝わってくることでしょう。戦争は憎しみからはじまる。この「憎しみの連鎖」を命がけで断ち切ってこられた両者の葛藤の過程が、私たちに教えているものは何か。戦犯管理所に入所させられたときはお互いが「敵同士」であった。その両者が最後には心を通わす「平和のための同士」とお互いに呼びあい、抱きあって再会を喜び合う姿は私たちに教えてくれるものはなにか、と考えると貴重な教材となるでしょう。

「両者の努力」を称えるだけでなく、中国全土で日本軍によってありとあらゆる残虐な被害を受けながらも、当時の中国の指導者たちが打ち出した戦犯への「寛大政策」の方針の神髄と、それを受けとめることに並々ならぬ苦労をされ、「鬼」を「人間」へ導いてくれた職員の方たちの努力にどこまで私たちが近づけるのでしょうか。ぜひ小冊子を何回も読んで、反芻してほしいものです。

「抑止力」とはなにか、「俺に手を出したら、あなたは何倍も痛い目に合うぞ！」と脅かすことが「抑止力」なのか。普天間基地は本当に必要なのか、現在に通じる根元的な問いかけを撫順戦犯管理所での体験が問いかけているのではないだろうか。

97才 現役の証言者「絵鳩 毅」さん著

小冊子「撫順戦犯管理所の6年」

—監獄が自己改造の学校だった—

を発刊！

このたび、撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部は上記小冊子を発刊しました。

小冊子は64ページです。3時間や4時間ではとても語りきれない、絵鳩さんの貴重な体験が詰まっています。撫順戦犯管理所で「本当に何があったのか」、ぜひじっくりと繰り返し、繰り返しお読みいただく意味のある冊子に仕上がったと確信しています。

以下の方法で注文してください。

販売価格、販売方法について

販売価格 (集会会場などで) **直接販売の場合 1部400円**

送付の場合 支払方法は振込用紙を同封します。

3部まではプラス送料及び手数料100円 6部まではプラス送料及び手数料200円

9部まではプラス送料及び手数料300円 10部以上の方は送料などを販売者側で負担します。

注文方法は下記により、お願いします。

メール、およびFAXで、注文者、または発送先の①〒番号、②住所、氏名、③TELを記入してご連絡ください。

FAX(TEL兼用)： 046－871－4263

メールアドレス：kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部 松山英司

撫順戦犯管理所の6年

—監獄が思想改造の学校であった—

はじめに

私は、明後日97才の誕生日を迎えますが、過去まだ夢の多い青春時代を日中戦争に駆り出された上、戦犯となり、28歳から43歳まで、15年間もの貴重な人生を棒にふるってしまいました。私は、終戦の年の6月、大隊長の命令に服従して、教育中の初年兵30名に、中国人捕虜4名を交互に刺突させてしまいました。戦後、この罪を問われて、ソ連のハバロフスク収容所から中国の撫順戦犯管理所に送還されて、6年間の監獄生活を送りました。

一昨年(2019)の11月、NHKは「認罪~撫順戦犯管理所の6年」と題するハイ・ビジョン放送を行いました。残念ながら私の意に副わない、不十分なものでした。なぜなら、そのテーマは、「中国側から認罪(罪を認めること)を強要された日本の兵士たちが、いかに苦慮しながらそれに対処したか」であって、撫順管理所で起こった奇跡、すなわち、「日本の戦犯が、中国政府の寛大政策によって、侵略戦争の鬼から、平和擁護の真人間へと転変した奇跡的事実」にはかたく目を閉ざしているからです。

今日は、皆様の貴重な時間をお借りして、この奇跡について、私の体験をのべてみたいと思います。皆様方の参考にでもなるなら幸いです。

ソ連から中華人民共和国への送還 ＜「捕虜」が「戦犯」となった＞

1950年7月、ソ連に抑留されていた日本人捕虜60万人の殆どが既に帰国していたころ、私たち関東軍将

兵と旧満州国官僚ら969名は、「帰国だ!」と告げられてハバロフスクの無人駅から、貨物列車に寄せられました。だが、それは「帰国」ではなく、中華人民共和国への身がらの送還でありました。中国政府は、ソ満国境の町綏芬河(スヰンガ)で、灼熱の貨車

で、疲労と飢餓にさいなまれていた私たちを、快適な客車と豊富な食事とで迎えてくれました。

だが、私たちベリアの捕虜が到着した撫順管理所の入口に掲げられた表札に「戦犯」の文字を見て、皆あぜんとしました。「俺たちは戦犯なのか？」という疑問が、以後6年間の監獄生活中、私たちをとらえて離さない深刻な課題となりました。

中国政府は、戦犯を人間として優遇した

撫順戦犯管理所は、昭和11年頃、当時の満州国が「反満・抗日・分子」を投獄するために建築したもので、じっさいに日夜残酷な拷問や虐殺が行われていました。その建物を新中国政府は巨費を投じて大改修し、スチーム・医務室・大浴場・理髪室・病棟などを備えた、近代的な明るい監獄に生まれ変わっていました。

周恩来総理は、撫順戦犯管理所に対して「戦犯とても人間である。人間である以上その人格を尊重せよ」と指示されましたが、当初、管理所内には深刻な問題があったと聞きます。職員の多くは、日本軍と戦い、あるいは見津から傷つけられ、あるいは日本軍に肉

親を奪われた人々でした。そのために皆「日本の戦犯が一刻も早く処刑されること」を願っていたそうです。多くの職員が、この「不愉快な仕事」から逃れるために朝鮮戦争への参戦を志願し、炊事員のある者は、「釜のゴミぐらいが何だ。奴等が食おうが食うまいが勝手にしろ！」と放言たり、理髪師ののる者は戦犯の頭髪をわざとぶざまに刈って、「ザマー見ろ！」とうそぶいていたそうです。

だが、中央政府の指示は厳しく、次のように指示されました。①戦犯本人をののしったり、手をかけたりしてはいけない。②医療は万全を期し、死なせてはいけない。③食事などは日本の民族習慣にあったものにせよ、と。

管理所では、この中央の指示を完全に実行するために何回となく学習会や反省会を開いて、工作員全員の思想統一をはかったとイいます。こうして、管理所の全工作員は、中央の指示を厳守して、「敵をも愛する奇跡的な優遇」を我々に与えてくれました。

強制労働がなかったばかりか、自棄になって反抗する戦犯に対しても、ただの一度も、ののしったりなぐったりするようなことはありませんでした。

中国の職員たちは、日に2度の高粱飯を食べながら、戦犯には3度3度米の飯を与えたばかりか、正月や記念日

には雑煮・寿司・お萩などの特別食までふるまってくれました。

日々の運動時間の確保はいうまでもなく、週に1回の入浴、月に1回の理髪と月例身体検査と体育日の設定、数多くの映画上映会開催、患者の民間病院への入院手配、また認罪後には春と秋2回の体育祭と文化祭の開催、そしてありあまる学習時間の保障等々、まさに至れりつくせりの待遇でした。

遊び三昧の1年間

<だが、中国を見る眼が変わった>

撫順戦犯管理所には、1所から6所まで平屋の6棟がありましたが、私たち下士官以下の兵士は3所と4所の大部屋に1室15名ずつ収容されました。日々強制労働はなく、日々豊かな食事を与えられながらも、戦犯のレッテルを貼られてヤケクソになっていました。我々は、そのうさ晴らしに、明けても暮れても手作りの道具で、将棋や碁、花札やマージャンなどの遊びにふけていました。だが、この1年の間に中国を見る眼を大きく変える体験にも遭遇しました。

入所してほどなくの10月、朝鮮戦争が激化したためにハルピンの監獄に移されました。だが、そのとき孫明齋収容所長は行き先を明言し、そのと

おりであったことに、私は感動しました。真実を告げられることは、人間扱いをされたことなのです。「帰国、帰国」とあざむき続けたソ連とは逆に、私は新中国には信頼感情を抱くことができました。

また、この年の大晦日のこと、お正月の食べ物として、各小部屋に柔らかい餅、林檎、干柿、南京豆、飴、お菓子などが配給されました。私たちは、予期もしなかった贈り物に感動するとともに、特に戦後1度も口にできなかったお餅には涙が溢れ、中国への感謝の念を深めました。

また、当時戦犯の多くは、「アメリカ軍が中国まで攻めこんできて、我々を救出してくれること」を夢想したり、また中国の人民義勇軍が参戦すると、「日本軍でさえ負けたアメリカ軍に勝てるはずはない」と見くびっていました。だが、中国が参戦するやたちまち停戦へと追いこんでしまいました。それは、私たちにとり、正に「世紀の奇跡」であり、中国への畏敬の念を呼ぶことになりました。

だが、私たち戦犯に決定的な影響を与えたのは、戦犯管理所の一貫した「敵をも愛する優遇」でした。私は、過去日本軍が中国人捕虜などは人間と思わず、やたらと拷問したり、虐殺したりしていた仕うち思い浮かべ、わ

が大和民族とその一員である自己をふかく恥じるとともに、中国工作員たちの「偉大な人間性」に、心から敬服しました。

こうして、私は、幼い頃からもち続けた「大和民族優越論」、そしてその裏返し「中国民族侮蔑の思想」をかなぎりすてることができました。

それは、イソップ物語の「北風が強く吹けば吹くほど、旅人のマントを脱がすことはできないが、太陽が暖かい光で旅人を包むと自分からすすんで脱いでしまう」という、あの「北風と太陽」の寓話にも似ていました。

学習への目覚め

＜初期の学習は、本の丸写しでした＞

翌年3月、また撫順の管理所に戻りましたが、入所1年後から各部屋に回ってくるようになった「人民日報」から知り得た「ワルシャワ世界平和擁護大会」や、6億人の署名を集めた「ベルリン・アピール」など、世界を怒涛のように揺さぶっている「平和勢力」のことを知ると、私たちはこう思うようになりました。「時代は大きく変わったらしい。古い知識の殻を脱ぎ捨てて、真剣に学習すべきときがきた」と。

やがて各部屋に日本語の各種図書、例えばプロレタリア文学作品、河上肇

の「貧乏物語」、野呂栄太郎の「日本資本主義発達史」、マルクスの「資本論」等々が回覧されてくるようになると、借りられる期間が10日程度でしたので、各人が目当ての図書を夢中で丸写ししました。またそれを互いに見せあって読んでいました。これが初期の学習でした。

理論学習の成果

＜真理への新たな視点を得た＞

やがて、管理所のマイクを通じて「社会発達史」が放送されると、次第に学習への意欲が高まり、部屋ごとの共同学習が始まりました。学習組長と生活組長を選出して、日課を決めての整然たる自主的な学習がはじまりました。



私たちの部屋では、まず毛沢東の「新民主主義論」が教材として選ばれました。これは、抗日戦争中から戦後にかけての中国共産党の政策をのべた

もので、力づく、また明快で、中国の民主主義社会への眼を開くことができました。

毛沢東の思想に魅了された私たちの部屋では、次に、毛沢東の「持久戦について」を学習しましたが、そこには、日中戦争の性格や推移が科学的に解明されていて、まったくそのとおりの展開と結末を見たことに感嘆しました。

またこの論文の中には、八路軍が最後の勝利を収めるための三つの民主主義(上級と兵士、軍隊と民衆、そして捕虜との民主)が書かれていますが、日本軍隊とのあまりにも大きな隔たり、偉大さに絶句しました。とくに「**捕虜との民主**」を読んだときには、管理所の中で常日ごろ受けている人道的待遇も、すでにここに深い根拠を持っていたことを知り、私の感動はとまりませんでした。

さらに、部屋では「実践論」、その次には「矛盾論」を選び、2ヶ月ほどの共同学習をしましたが、私はこの二つの著書に決定的な影響を受けました。これらの著作は、哲学の基礎的な論文でありながら、また中国革命の理論的指導書ではありますが、じつに平明で、わかりやすい文章で書かれていて、私は「人民のための哲学」は、こうでなければならない、と悟りました。

また、これらの著作からは、認識活動における「実践」即ち、生産活動、文化活動、政治活動、特に階級闘争の重要性を教えられました。私の過去の学究的立場は、日本の現実や政治から目をそらし、ファシズムの脅威から身を守るために、「象牙の塔」の中に逃避していたにすぎなかった、と強く反省させられました。そして、私は、「真の哲学とは、人類の共通の願いを自己の良心とし、世界を改造する力とならねばならない」と悟りました。

セメント瓦の生産競争 ＜思想点検の場となった＞

撫順戦犯管理所に来て4年目を迎えた1953年ころには、私たちも中国の各方面での飛躍的發展を心から喜べる人間となっていました。そして、「私たちも何か中国社会のために役立ちたい」と管理所に願いました。その春、中庭にアンペラ小屋が建てられて、3ヶ月間セメント瓦の生産に従事することができました。そこで、瓦作りに習熟した1月後から、中国全土に展開されている生産競争に習い、各部屋対抗の激しい生産競争を展開しました。その結果、3ヶ月間で140万枚のセメント瓦を中国社会に送り出すことができました。

私は部屋の生産責任者の一人として、日々計画をたて、先頭に立って奮闘しました。結果、最初の生産競争では3位だった成績を、次には第1位に引きあげることができました。だが、管理所から表彰はされませんでした。それは組が生産した瓦に不合格品が多かったとされ、呉浩然指導員からは「一部に金票主義(優勝主義)が見られた」と批判されてしまいました。

こうして瓦生産は、結局我々の思想点検の場となりました。私は、過去の学習から「人民服務の思想」を学びとったと思いこんでおりましたが、この瓦生産では結局、私にはいまだ自己中心的な競争主義という資本主義思想が残存することを強く反省させられました。

「帝国主義論」の学習 ＜過去の戦争への目を開く＞

瓦生産のあと、各部屋は同時にレーニンの「帝国主義論」の学習に入りました。そこで、私たちは「資本主義が高度に発達した帝国主義段階では、必然的に他国の資源や市場を強奪する侵略戦争に走ることを初歩的ながら理解することができました。

そこで、先の日中戦争もそのような侵略戦争であったかを、皆で検討しま

した。当初多くのものは、自己の命をかけた戦争をいまだに「東洋平和のための聖戦だ」と信じていました。互いに自己が体験した戦争の実態を暴露しあった結果、ようやく日本帝国主義の侵略戦争であったことを理解しました。だが、各自によって暴露された戦争犯罪は、大日本帝国が犯した戦争犯罪だとして、自己の戦争責任とは結びつけることはその時点ではまだできませんでした。

認罪(坦白)運動の展開

①部屋ごとの認罪学習

翌年、入所5年目を迎えた1954年3月のある日、各部屋の学習組長が指導員に呼ばれました。帰ってくると、いま所内ではすでに認罪書を提出しているものがあることや、その意義について話しました。

以後各部屋の学習は「認罪」に集中し、真剣に討議しました。多くの者に「自己の犯罪を暴露した後はどうなるのだろうか」等々のとまどいがありました。時間をかけて討議した結果、全員が自己の犯した戦争犯罪をすべてを暴露し、中国人民の前に謝罪するのが、人間のとるべき道と悟り、以後各部屋の全員が自己が犯した戦争犯罪のすべてを紙に書きとどめる「認罪

（坦白）運動」がはじまりました。

②認罪模範者の発表集会が開催された

そして翌4月、管理所は全戦犯を管理所の中庭に集められて、初めての集会を開きました。この集会で、元第39師団の中隊長であった宮崎弘が、侵略戦争中に犯した自己の戦争犯罪を洗いざらい暴露しました。彼は、大隊副官のとき、自ら計画を立てて、湖北省当陽県白楊寺村を襲撃し、全村を焼きはらった上、村民数百名を皆殺しにしたこと、またそのとき部下に命じて、5組の赤子とその母親たちを刺殺させたこと、ある時は自ら捕虜の少年を日本刀の試切りにしたこと等々、身の毛もよだつ犯罪の数々を、ときには声を詰まらせ、ときには泣きながら語り続け、最後にこう結びました。

「私は、本当に人間の皮を被った鬼でした。今ここに、中国人民に対し、心からお詫びします。この上はいかなる処罰をも受ける覚悟です」と。

会場は深い緊張と沈黙につつまれました。しばらくの時間をおいて最後に孫明斎管理所長は簡単にこう締めくくられました。「今日の宮崎の認罪は、比較的よくなされた。諸君は部屋に帰り、今日の報告にもとづいて十分学習するように」と。

③グループ別の認罪

そこで、また、宮崎の認罪を中心に各自の認罪思想を問いたす学習が1ヶ月ほど続きましたが、程なく、同じ部隊の十数名ずつの「認罪グループ」が編成されました。そこで、先ず各人が犯した罪を洗いざらし告白し、それを今どのように考えるかをのべると、グループ員がそれについて意見や批判を述べます。そして最終的には、各グループに派遣されている中国の検察官が合否を決めるという方法がとられました。

私は、第59師団の1グループに配置され、索格荘での捕虜の集団刺突を始め数件の罪を告白し、「心から謝罪します」と結びましたが、それを聞いたグループ員からは、「石渡（私の旧姓）にはまだ軍国主義思想が残っている」と批判され、検察官からもやり直しを命じられました。私は二度目の挑戦にも失敗しました。認罪とは、被害者の立場に立つことであった。

眠れない夜が幾日か続いたころ、管理所のマイクを通じて、何人かの認罪報告がなされましたが、それらはいずれも血を吐くような告白であり、その叫び声は被害者の激しい怒りの声のように聞こえました。

これを聞いて、私は悟ることができ

ました。私の今までの認罪は、「自己擁護の立場」に立っていて、殺害された「被害者の立場」に立っていなかった、ということでした。

私は、いままで心のどこかに、「大隊長の命令であった」とか、「日本の軍隊機構ではやむを得なかった」として、自己を弁護する気持ちが残っていました。それをグループの同僚は察知して、「軍国主義思想が残っている」と指摘してきたのでしょう。まったくその通りであって、殺害された被害者とその肉親たちは、「君は大隊長の命令でしたのだし、当時の日本軍隊では避けられない行為だったから、許してやろう」などとは言うだろうか。いや、それどころか、「索格荘で、4人の中国人捕虜を虐殺した日本軍兵士全員を、柱に縛り付けて突き殺せ！」と言うに決まっています。

私は3度目の認罪で、このようなことをのべて、ようやく検察官の許しを得ることができました。

創作活動の展開

1954年6月頃、苦しい「認罪運動」が終結すると、管理所の中にまた笑いがよみがえり、人間が生まれ変わったような新しい躍動感がみなぎりはじめました。そして、今まで各部屋の扉を固く閉ざしていた施錠も外され、

お互いに各部屋への出入りも自由になりました。

また同時に「学習委員会」(学習部、生活部、文化部、)編集部、体育部)が作られ、私たちの生活全般を自主的に統括することになりましたが、学習時間は午前中だけとなり、午後からは各自が所属する部活動に自由に参加できるようになりました。午前中の学習は、「創作活動」でした。まずこの活動の意義や目的をしっかりと把握するために、私たちは毛沢東の「延安における文芸上の諸問題」を共同で学習したり、また趙樹理や丁玲や老舍などの新しい中国の文芸作品をも研究したりしました。その後で全員が、自分の犯した罪を暴露する手記を書きあげました。

各人が書きあげた手記は、編集部を集められ、内容・形式共に優れたものを選び出す作業が続けられましたが、私も編集部の一員として、この作業に従事しました。

帰国した翌年、1957年3月に私たち戦犯の会は、光文社から「三光—日本人の中国における戦争犯罪の記録」を出版して、大きな反響を呼びましたが、それは、この時書かれた手記の一部でありました。

体育祭と文化祭の開催

中華人民共和国の日本戦犯 に対する処理の決定が発表 された

認罪が終わって帰国までの2年間は、毎年春秋2回の体育祭と文化祭が行われましたが、いずれも管理所の職員が参観されて、賞品などを頂きました。

体育祭では、バスケットとバレーの外に、学習委員会の5部の対抗となり、種目は100メートルから1500メートル競争、年齢別リレー、走高跳、走幅跳、障害物競走、重量運搬競争、借物競争等々多彩でした。私も42歳のとき、編集部の選手として幅跳に出場して5m48の記録<凄いい!!>で、2位を占めたこともありました。

文化祭は、中庭の戦犯の手になるステージで行われましたが、これも多彩で、私たちが大いにたのしませてくれました。音楽版と合唱班は、は、ロシア民謡(カチューシャ、トロイカなど)や新中国の歌曲(毛沢東賛歌、白毛女など)を演奏してくれました。舞踊班は、日本の北から南までの民族舞踊を演出し、喝采を博しました。「演劇班」も「太陽のない町」、「内灘村」などを上演して感動を呼びましたが、次第に音楽班、合唱班・舞踊班を巻きこんでのバラエティ形式のものに発展していき、とくに「原爆の子」は、圧巻で全員をくぎづけにしました。

1956年4月、管理所の金源教務科長から「中国政府の日本人戦犯に対する処理の決定」が発表されました。その中に、「主要でない日本戦争犯罪者、あるいは改悛の情がわりと著しい日本戦争犯罪者に対しては、寛大に処理し、起訴を免除することが出来る」という条文がありましたが、これを聞いて体の硬直を覚えない者はありませんでした。

私たちは約6年間の学習を経て、侵略戦争の中で犯した自己の罪を、被害者の立場から見直し、それを全て中国人民の前に告白しましたが、それにもかかわらず、誰もが動揺しました。「自分は起訴を免除される側だろうか、それとも起訴される側だろうか?」とか、また「若しも起訴されたなら、後はどうなるのだろうか?」等々です。

そこで私たちはまた、この「決定」についての討論学習に入りました。そこでようやくまた結論を得ました。それは、「私たち戦犯の側にあるものは、ただ一つ『認罪』だけだ。『起訴か、不起訴か』は、中国側に属することである」と。

そして、学習委員会の提案による「裁

判を要請する嘆願書」に全員が署名いたしました。

参観旅行

日本戦犯に対する処理の決定のあった直後、中国政府は中国国内の参観旅行をさせてくれました。330名程度を1単位とし、3回に分けて実施されました。とくに1、2の回目の組は、それぞれ約1ヶ月にわたり、瀋陽—北京—上海—漢口にいたる11もの都市の名所旧跡、各種工場、大学、生産合作社などを参観させてもらいました。

私の参観旅行は最終回の組でした。だが、近年にない猛暑のため、その出発が見送られているうち、8月21日の最高人民法定への出頭となってしまいました。したがって私たちの参観旅行は、前の2組とは逆で、判決後の旅行となり、しかも1週間の短期間で、場所的にも東北地方から華北地方に限られました。

私たちに許された参観旅行は、また「認罪学習」（過去の罪を見詰める学習）でありました。じじつ私たちは、参観旅行の行く先々で、日本軍隊の犯罪の跡を見せられることになりました。特に、「撫順炭坑」の露天掘りを参観したとき、「平頂山事件」（1932年、日本軍が平頂山部落の住民3千

名を機関銃で射殺した事件）のごく少数の生存者の一人である方素栄さんは、事件の一部始終を話されましたが、その中にこんな一節があった。

「私がどんな悪いことをしたと言うのでしょうか。心の優しい勤勉な両親や生れたばかりの弟が、どうしてあんなむごたらしい殺され方をしなければならいのでしょうか。私は日本帝国主義が敗北したとき、私の肉親がやられたように彼等を皆殺しにしてやると、泣き叫び、周りの人を困らせました。その時、私を教え導いてくれたのが、中国共産党の方々でした」と。

多くの仲間は方素栄さんの前に身を投げだして泣いて詫言しました。これに対して、方素栄さんは静かにこう言われた。「昔のことはもう過ぎ去ったことです。今さら、とやかく言うことはありません。ただ、皆さんが自分のしたことが犯罪行為だと気づき、もし釈放されて帰国されても、もう二度と侵略戦争に出てくることのないことを願ってやみません」と。



最高人民法院に立つ

＜「起訴免除一即日釈放」となる＞

中華人民共和国の日本の戦犯に対する軍事裁判は、実に寛大でした。1,062名中僅45名が、特別軍事裁判にかけられましたが、そこには死刑も終身刑もなく、最高刑が20年の禁固刑でした。だが、そこには戦後すでに経過していた11年が含まれておりました。その他の戦犯は、1956年夏、3班に分かれて「最高人民法院」に出廷して、「起訴免除一即日釈放」の寛大な処置を受けました。

私は第3回目の組に入っていました。同年8月21日の朝、私たち354名は、最高人民法院への出頭を命じられました。用意された大型バスに乗り込むと、撫順市の元日本人女学校の体操館に通されましたが、ここが法廷でした。正面の壇上に正装した検察官団が控え、後方の2階席には各界の代表者と見られる傍聴者で埋まっていました。

主席の検察間が、通訳を従えて立ち上がると、最初に戦犯一人一人の名前が呼ばれ次々と起立します。354名全員の名が読み上げられた後、こう言い渡されました。「全国人民代表大会常任委員会の『目下勾留中の日本戦争犯罪者の処理に関する決定』の規定に

基づいて、ここに寛大処理を行ない、起訴を免じて即日釈放することを決定するものである」と。

通訳の言葉でこの内容を知ったとき、私たち全員は涙を流し一斉にすすり泣きました。一度は死を覚悟した人間の、蘇生への強烈な喜びであり、また中国政府の寛大処理に対する感謝の涙でありました。

やがて多くの仲間が発言を求めて挙手し、許された者は、異口同音に「二度と侵略の銃はとりません」、「平和の日中友好のために闘います」という決意を表明しました。

釈放後から帰国まで

①撫順戦犯管理所で盛大な送別会を受ける

その夜、私たちは、予期もしなかった管理所での大送別会を受けました。場所は私たちにとって一番思い出の深い、舞台のある中庭でした。白いクロスにおおわれたテーブルが庭いっぱいにおかれ、その上を豪勢な中華料理とビール瓶とで埋めつくされていました。全員が席に着くと、大きな拍手とともに孫所長が笑みをたたえながら、こう挨拶されました。

「皆さん、おめでとうございます。今日あなたがたは、我が国の寛大政策

を受けて起訴を免除され、釈放になりました。この寛大処理を受けることができたのも、あなたがたが真面目に学習して思想改造を成しとげたからであります。私は管理所の全職員を代表して、心からお喜び申しあげます。帰国されてからも十分健康に留意されて、平和で幸福な生活を送って下さい」と。

そして高々と杯を掲げて、乾杯の音頭をとられました。わきたつ拍手のなかを、先生方は手に、手にビール瓶を持って、私たちの席に押し寄せてきて、次から次へと注いで回られました。私たちは、心から先生方に礼をのべると、先生方は、帰国後の健康を心から願って下さいました。あちこちに感激の渦巻きができて、宴は深夜まで続きました。この夜は誰も眠れませんでした。

翌日、私たちは真新しい人民服、人民帽、ベルト、革靴、毛布、雑嚢、その他の日用品と中国貨幣50元などを支給されました。そして、この日の夕方、私たち354名は、寝台車・食堂車それに病人用衛生車のついた特別列車で、懐かしい撫順を離れて天津に向かいました。6年間私たちを懇切に指導してくださった呉浩然先生を始め、管理所の多くの工作人員の方々も同行されました。

②天津で受けた歓待

天津では、豪華な「恵中飯店」というホテルが私たちの宿舎に当てられました。ここで連日連夜、とびきり上等な中華料理がふるまわれ、またここを根城にして、「人民公園」や「水上公園」などにも遊び、また京劇や映画やバスケットの試合なども見せて頂きました。

中国を去る前夜、「天津工人劇場」で、私たちの文工班が「天津歌舞団」との交歓会を行ないました。私たちの文工班は、ロシア民謡や中国の歌曲を演奏したり、日本民謡や踊りを披露したりすると、場内の中国人から熱い拍手が送られました。天津歌舞団からは、中国伝来の歌や踊りや曲芸が披露され、私たちを熱狂させました。

最後に三輪敬一は、第3次釈放者を代表して、「中国人民と中国紅十字会に対する感謝とお別れの挨拶文」を朗読し、また、中国最高人民検察院と撫順戦犯管理所と中国紅十字会天津分会とに対して、感謝を込めて記念の「錦旗」を贈呈しました。

③瀋陽港での離別

1956年8月31日、私たちは終に中国を離れる日を迎えました。瀋陽の港には、日本赤十字社、日中友好協会、日本平和連絡会の3団体によって

差し向けられた日本船「興安丸」が待機していました。私たちは、「皆様、長いことご苦労さまでした！」という同胞の温かい言葉に迎えられて乗船し、夕食は白米に味噌汁と鯛のお頭付きで、しみじみと、懐かしい日本の味を味わうことができました。

2 1 時出帆の予定が大分延びて、2 4 時 3 0 分頃でした。興安丸のエンジンがにわかに強い響きをあげはじめたので、一斉に甲板に躍り出ると、船はいま緩やかに港の岸壁を離れようとしています。岸壁にはこんな時間なのに、管理所の先生方や中国紅十字会の人々が、総出で見送っておられます。全員、胸の詰まる思いで、大声で叫びました。

「さーようーなーら……おーげんーきーでー！ 」

やがてわが文工班のバンドが、「東京ー北京」の曲を演奏し始めると、これに和して、全員の大合唱が始まりました。誰の目にも、涙が光っている。大合唱は、「東京ー北京」から「平和を守れ」へ、そして「全世界人民の心は一つ」……と、次から次へと続く。私たちは、いつまでも岸壁で手を振り続けている中国人民の代表者たちに向かって、手を振りながら叫び続けた。「中日人民友好万歳！」と。

岸壁が視野から消え去ろうとする

ころ、たった一つ点のように立ち尽くす人間の姿を見た。呉浩然指導員その人であろう。この人に代表される中国人民の私たちに寄せる深い友情と期待とを、私は痛いほどに感じとることができました。

終わりに

過去日本の天皇制国家は、私たちを侵略戦争の尖兵としたばかりか、戦犯にまで陥れましたが中華人民共和国はこの呪うべき敵、戦犯を平和と民主を護る良心ある人間へと蘇生させてくれました。撫順戦犯管理所は日本戦犯の、正に思想改造の学校でした。私は、15年間にもわたる戦争の暗い歴史の中で、せめても最後の期間この撫順戦犯管理所で過ごせたことは、じつに幸せであった、といまも思っています。

帰国後、私たち戦犯は、「中国帰還者連絡会」を結成して、8年前高齢のため会を閉じるまで、40数年間にわたり、およばずながら、侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献する運動を続けてまいりました。これもひとえに各自が侵略戦争中に犯した罪の償いでありましたが、また後続く若い世代には我々の二の舞だけは踏んでもらいたくないと考えたからでもあ

りました。

幸いにも今、私たちの思想と活動とを受け継ぐ会（撫順の奇蹟を受け継ぐ会）が誕生し、全国的な活動を展開しております。誠に感謝に堪えません。この会員の方々をはじめ、ここにご参

集の時代の良心である皆様方の一層のご健闘を祝福して、私のつたない報告を終わります。ご静聴、ありがとうございました。

（2010・3・14 「神奈川証言集会」）

絵鳩さんの近況

4月末に絵鳩さんのお宅にお訪ねする機会がありました。

いつもの通りお元気そのもので、奥様と一緒に私たちを迎えてくださいました。そこで絵鳩さんがお話しされたことです。

絵鳩さんは「3月に久しぶりに同窓会を開催したんだよ」と仰いました。「じつはねー」と言いながら説明をしてくださいました。絵鳩さんは軍隊への入隊前にそれぞれ数ヶ月間でしたが、山梨女子師範学校と長野県上田高等女学校の教師をされていたことは証言集会での経歴に書かれてあります。その教え子たちと今も年賀状のやりとりをされていることも聞いていました。証言集会で絵鳩さんがそのエピソードが話されたときは、期せずして拍手が起きました。その教え子たちから声がかかったの同窓会だったのです。

「横浜に7人も集まってくれましたよ」と喜んでおられました。聞けば、その教え子たちが85才だそうです。そして絵鳩さんが97才、・・・。

70年近く以前の、そのときの先生と生徒にもどって、「じつに楽しかったよ」本当にうれしそうに話してくださいました。

「ひとり一人覚えておられますか」とヤボな質問に「当然ですよ！」と返事が返ってきてまたひとくさり、思い出話を聞かせてくださいました。そして仰いました。

「3年後にまたみんなでお祝いしようと約束したんだよ」、と。3年後には教え子さんたちが88才の米寿を迎え、絵鳩さんは100才を迎えます。そして絵鳩さんは「みんなと約束したから100才までは生きなければならないんだよ！」とニコニコしながら話してくださいました。

感動とともに絵鳩さんから、もっともっと聞いておかななくてはならない。聞かせてもらいたい、とあらためて考えています。

編集者